様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　４ 月 ２３ 日現在

機関番号：１３９０２
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2020～2023
課題番号：２０Ｋ０２７６２

研究課題名（和文）国語科メディア対話論の構築―対話過程における学びの明確化―

研究課題名（英文）Building a theory of media dialogue in Japanese language - Clarification of learning in the dialogue process -

研究代表者
砂川　誠司（Sunagawa, Seiji）

愛知教育大学・教育学部・講師

研究者番号：２０６４７０５２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,000,000円

研究成果の概要（和文）：SNSの利用規約をめぐる対話と、写真についての対話の２種類の対話過程を把握することができた。
SNSについての対話からは、異なる立場に言及しながら対話を進めることの重要性が明らかとなった。また、写真についての対話を捉える観点には、①写真内の存在や物質を規定、②写真に対する感情的な反応、③経験的な理解の反映、④意図的な脱文脈、⑤ミニ・ストーリーの構成、の５点があることが明らかとなった。
また、SNSや写真に限らず、国語科においてメディアについて理解する授業を展開する際には、学習者を「議論する存在」と定位することが必要であることが明らかとなった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
国語科の話し合いの学習は、その対象を文学や説明文だけでなく広く一般的な事象にも適用させるものであるが、研究の対象となっているのは、文学の話し合いや合意形成のための話し合いが中心であり、メディアについては検討もなされていない。本研究は、SNSや写真に限定はされるものの、メディアに固有の見方があること、そしてその固有性ゆえに話し合いの方向付けがメディアの理解のしかたに影響されることを示唆している。国語科教育における話し合いの学習をより社会と接点のあるものとして展開していくためには、話し合いの対象の固有性をいかに捉えるかが重要であり、本研究はそのひとつの参照点となるものである。

研究成果の概要（英文）：We were able to identify two types of dialogue processes: dialogue about the terms of use of SNS and dialogue about photographs.
The dialogue about SNS revealed the importance of advancing the dialogue while referring to different positions. It also became clear that there are five perspectives from which to capture dialogues about photographs: (1) defining the existence and substance within the photograph, (2) emotional responses to the photograph, (3) reflection of experiential understanding, (4) intentional decontextualization, and (5) composition of mini-stories.
It also became clear that it is necessary to position the learner as a "discussing being" when developing lessons for understanding media in Japanese language classes, not limited to SNS and photographs.

研究分野：国語教育

キーワード：メディア・リテラシー　国語科　写真　対話

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

インターネットの発達によって、誰でも手軽に瞬時に情報を発信できるようになったが、そのことはかえって情報を十分に吟味しながら受け止めるような態度が不要だという雰囲気をも作り出してしまった。情報をすばやく「共有」できるという特徴を持つソーシャルメディアの発達は、人々を連帯させ、新たに組織化する力が発揮されこそすれ、誤った情報の拡散や誹謗中傷の集中に帰結することも少なくない。このような時代にあって、メディア・リテラシー教育の必要性がメディア研究者のみならず、文学・文化研究、あるいはジャーナリストや美学の研究からも提起されている（例えば津田大介・日比嘉高（2017）、松本健太郎編（2016）、国谷裕子ほか（2018）など）。これらの問題提起は目的論的な性格をもつため、学校におけるその育成方法に関しては、教育研究の蓄積をもって検討する必要がある。現在、最も参照の中心となるのは、David Buckingham(2003)に説明される「制作」を中心としたアプローチである（森本洋介（2014）、羽田潤（2008））。その理論枠組みは、国語科の授業理論としても検討・援用されてきた（砂川誠司（2009）、砂川誠司（2011））。

一方で、国語科においては、平成 29 年度の学習指導要領改訂によって推進されている「主体的・対話的で深い学び」の影響もありつつ、とりわけ、対話的な活動を中心とした学習方法が多くみられるようになってきた。そこでは例えば、文学についての対話がどのように引き起こされ、いかにして学びが生起するかという問題を明らかにすることが、国語科における文学の授業設計においては避けて通れない重要な課題となっている（住田勝ほか（2016）など）。しかし、文学についての対話は、子どもたちのメディア生活にすぐに生かせるわけではない。むしろ、彼らの生活と直結するメディアについての対話のなかにこそ、「ことば」の育ちを本物にする生きた言葉が存在すると考えた。

２．研究の目的

本研究の目的は、子どもたち同士のメディアについての対話がどのように引き起こされ、そこからいかにして学びが生起しうるのかを明らかにすることである。

３．研究の方法

Ⅰ メディアについての対話過程の把握

日常的に触れているメディアについての対話を教室に引き起こし、その対話が偏った意見に収束したり、対立的なまま並行する対話が行われたり、あるいは互いに情報を確かめ合いながら対話を進めたりするなど、どのような方向性をもつものか把握する。また、それが対話の進行過程のどこで決定づけられたかという対話の分岐点を把握する。これらにより、メディアについての対話に特有の現象を記述する。実践は合計４単元実施した。高等学校での実践２単元と、小学校での実践２単元である。

Ⅱ メディア教育対話論の立論

Ⅰと並行し、これまでのメディア教育研究の蓄積のうえにメディアについての対話がどのように位置づけられうるものであるかを検討する。特に David Buckingham の理論に、対話のなかから生じる学びが具体的にどこまで捉えられるかということを明らかにする。これには Buckingham の著作に関しての訳出・検討の作業が伴う。そして、Ⅰで得られる対話過程の分析結果を理論的に語る枠組みのあり方を明らかにし、メディア教育対話論を立論する。

４．研究成果

まず、Ⅰの成果として、SNS の利用規約をめぐる対話と、写真についての対話の２種類の対話過程を把握することができた。

SNS については、高校生に対して、利用規約の書き換えを行った。SNS の利用経験が比較的多いクラスでの実施であり、経験的な理解を反映させることが発言に強く表れた。事例として、対話がメディア・リテラシーを身につけることにつながる例とつながらない例を捉えることができた。しかしそれらは、かなり偶発的なものであり、一般化まではできなかった。ここでは、利用規約を書き換える「立場」を明確にし、異なる立場の意見をめぐって対話がなされることが期待された。しかし、対話は何らかの分岐点をもとに進行していくというよりも、中心的な対話参加者の意見で進められることも多く、全般的に、異なる立場に言及しながら進められるものとはならなかった。SNS についての実践は、国語科カリキュラムとして位置づいているものではないため、学習者としても授業内で自由に発言することに抵抗が少なかった。それゆえ、リアリティのある対話サンプルを得ることができたが、それはむしろ教育的な介入が非常に困難なものであることも示唆された。実践については実践論文として、発表を行った。日常の経験を教育の場面に持ち込むことが、リテラシー教育にもたらす影響については、Ⅱに関わり、Potter& McDougall (2017)から「第三空間」論を援用し、異なる言説がいかに交渉し、新たな意味がどのように生産されるかという点から、「動的なリテラシー」を考えることの重要性を指摘した発表をおこなった。また、改めて、イギリスにおけるカリキュラムの構成について検討を実施し、

研究ノートとしてまとめた。

写真についての対話は、小学生を対象に行った。これもⅡに関わり、国語科の授業において写真を扱うことを「単なる意味連関の再構築のために写真を分析することではなく、不在への想像を、その存在を信じるなかでめぐらすこと」と定位し、実践を行った。これは、具体的には教科書に掲載されている写真に関わる教材の分析から明らかにしたことである。実際の小学生の対話過程においては、写真に対して以下の点に特徴をもつ対話が行われた。

① 写真内の存在や物質を規定
② 写真に対する感情的な反応
③ 経験的な理解の反映
④ 意図的な脱文脈
⑤ ミニ・ストーリーの構成

これらの点は、メディアの自律的な話し合い活動ができるようにするために、子どもたちの対話のなかでなにが行われているかを捉える観点であり、特に⑤の観点については、写真を物語の結末として見るのではなく、物語の発端として見ることにつながる可能性のあるものとして、意識したい側面であることが明らかとなった。このことについては、論文としてまとめ、発表した。

Ⅱの成果としては、David Buckingham の「デジタル資本主義時代のメディア・リテラシー教育」訳出、および『メディア教育宣言』の訳出・出版をおこなった。後者の書籍に関しては、一般書として、メディアの教育を包括的に考えていく際に重要なものである。また、SNS に関して利用規約を扱うことを高等学校国語科の実用文として捉えること、また、同じく高等学校では「現代の国語」の教材分析から学習者を議論する存在として定位すべきことを導いた。

これらⅠ・Ⅱの成果は、メディアに固有の見方があること、そしてその固有性ゆえに対話の方向付けがメディアの理解のしかたに影響されることを示唆している。国語科教育における対話の学習をより社会と接点のあるものとして展開していくためには、対話の対象の固有性をいかに捉えるかが重要であり、本研究はそのひとつの参照点となるものである。

参考文献

津田大介・日比嘉高（2017）『ポスト真実の時代』、祥伝社
松本健太郎編（2016）『理論で読むメディア文化』、新曜社
国谷裕子ほか（2018）『世界思想 特集メディア・リテラシー』、世界思想社
森本洋介（2014）『メディア・リテラシー教育における「批判的」な思考力の育成』、東信堂
羽田潤（2008）『国語科教育における動画リテラシー教授法の研究』（渓水社）
砂川誠司（2009）「メディア・リテラシーの授業における感情を伴う<振り返り>の必要性 ：D.Buckingham の学習モデルの検討を通して」『国語科教育』第 66 集、pp.35-42
砂川誠司（2011）『国語科におけるメディア・リテラシー観の探究』博士論文、広島大学
住田勝・寺田守・田中智生・砂川誠司・中西淳・坂東智子「社会文化的相互作用を通して構成される文学の学び―「ヴィゴツキースペース」を用いた「高瀬舟」の授業分析」『国語科教育』第 79 集、pp.39-46
Buckingham, D. (2003) Media Educatoin, Polity
Potter, J., McDougall, J. (2017) Digital Media, Culture and Education: Theorising Third Space Literacies, Palgrave Macmillan UK.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計9件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　2件）

１．著者名 砂川誠司	４．巻 82
２．論文標題 国語科メディア教育における対話的活動の検討 ―写真についての話し合いをどう捉えるか	５．発行年 2024年
３．雑誌名 国語国文学報	６．最初と最後の頁 115-135
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 砂川誠司	４．巻 81
２．論文標題 現代の国語」における情報・メディア・人工知能（AI）	５．発行年 2023年
３．雑誌名 国語国文学報	６．最初と最後の頁 49-62
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 砂川誠司	４．巻 1
２．論文標題 国語科で写真を教材として考える試み―教員養成大学における授業として	５．発行年 2023年
３．雑誌名 ランガージュ１	６．最初と最後の頁 122-141
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 砂川誠司・宮澤宏枝・牧野隼弥	４．巻 7
２．論文標題 制作的活動によるメディア・リテラシー教育の実践 ： SNS利用規約の書き換えの分析	５．発行年 2022年
３．雑誌名 愛知教育大学教職キャリアセンター紀要	６．最初と最後の頁 239-246
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 砂川誠司	4．巻 80
2．論文標題 国語科カリキュラムにおけるメディアの役割に関する研究ノート―Connolly, S.（2021） The Changing Role of Media in the English Curriculum を読む―	5．発行年 2022年
3．雑誌名 国語国文学報	6．最初と最後の頁 60-51
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 砂川誠司	4．巻 580
2．論文標題 写真を教材と捉える視点	5．発行年 2020年
3．雑誌名 月刊国語教育研究	6．最初と最後の頁 42-49
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 砂川誠司	4．巻 79
2．論文標題 メディア・リテラシー関連教材として実用文を捉える―SNSの利用規約を書き換える活動の提案―	5．発行年 2021年
3．雑誌名 国語国文学報	6．最初と最後の頁 76-65
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 園山繁樹 ， 趙成河 ， 時津啓	4．巻 2
2．論文標題 知的障害と自閉症を併せ有する児童生徒の「主体的・対話的で深い学び」に関する一考察	5．発行年 2021年
3．雑誌名 島根県立大学・島根県立大学短期大学部教職センター年報	6．最初と最後の頁 67-81
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 園山繁樹 ， 佐藤久美 ， 時津啓	４．巻 2
２．論文標題 知的障害特別支援学校のカリキュラム・マネジメントに関する一考察	５．発行年 2021年
３．雑誌名 島根県立大学・島根県立大学短期大学部教職センター年報	６．最初と最後の頁 82-96
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計1件（うち招待講演　1件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 砂川誠司
２．発表標題 国語科メディア・リテラシー教育論再考―SNS時代のメディア表象と向き合うために―
３．学会等名 全国大学国語教育学会（招待講演）
４．発表年 2020年

〔図書〕　計1件

１．著者名 デビッド・バッキンガム、水越 伸、時津 啓、砂川 誠司	４．発行年 2023年
２．出版社 世界思想社	５．総ページ数 160
３．書名 メディア教育宣言 ： デジタル社会をどう生きるか	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	時津　啓 (Tokitsu Kei) (20518005)	島根県立大学・人間文化学部・教授 (25201)	

６．研究組織（つづき）

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究協力者	中村　暢 (Nakamura Toru)		
研究協力者	宮澤　宏枝 (Miyazawa Hiroe)		
研究協力者	牧野　隼弥 (Makino Junya)		

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関